

NIHONJIN NO WASUREMONO
日本人の忘れもの
 第2部 忘=華 森清範 清水貴真

「始末」する
 いろいろ

私は、そそっかしい性格の上、いつも何かに追われている生活をしているので、よく忘れ物をする。1日に帽子と雨傘と何だったか大事な書類を3カ所に一つずつ、忘れたことがある。もちろん、それを取りにもう一度、来た道をたどりなおして回収した。大学の研究室や、以前仕事していた「京都市史」の編さん室などでも忘れ物を思い出して、来た道をよく戻ったものだった。さすがに保育所に預かってもらっていた子ともたちを迎えに行くのは、忘れたことはないけれど。

たわいもない話はさておき、日本人が忘れてきた、大切な忘れ物とは何だろう。

私は戦時下に育ち、叔父の家に疎開し居候となり「他人の飯」ならぬ「親類の飯」を食べさせてもらっていた。大事にはしてもらったが、「町の子は理屈は達者だが、農作業などの仕事はできない」と周囲から見られ、子どもなりに苦労をした。戦争になったら、大恐慌になったり、その当時から考え



脇田晴子
 滋賀県立大名塾教授

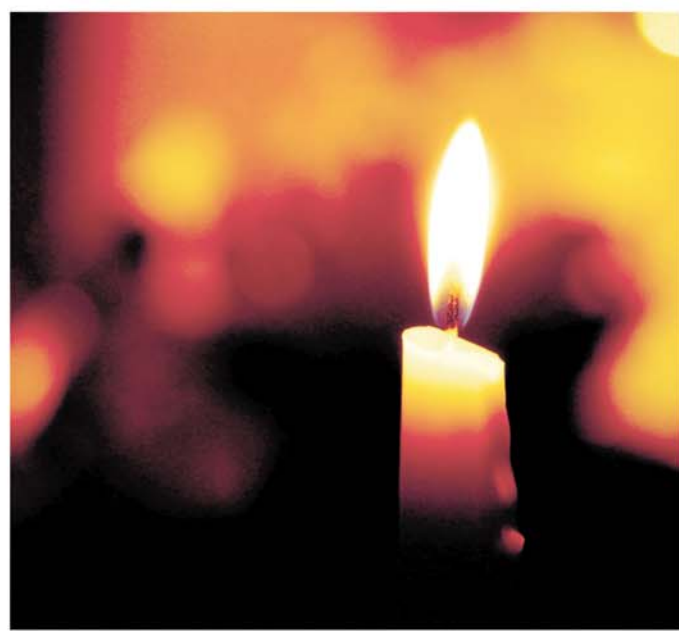
アメリカ人が
 教えてくれた
 ピューリタンの
 質実剛健の気風。

と現在ほど暮らしやすい、いい時代は無い。何よりも空襲警報が鳴り響くことなく、毎日が平穏で、予定通りに物事が進んでいく現在が好まれている。もう何十年前の話であるが、アメリカで日本史の研究会があり友人の家に泊ってもらったときのこと。日本近世史専攻のスターン・ハンリー教授が、デパートで買ったプレゼントの包み紙を大事そうに畳んでしまい込んでいたのを見た。「へえ、アメリカ人もそうやって再利用するのね。アメリカの人ってパツパツと捨ててしまうのかと思ってた」と私が言うと、彼女は「私はそれは日本人のことだと思っていますよ」

と言いつ返された。彼女はイギリスから最初にアメリカに移住したメイ・フラワー号乗船者の子孫であることを誇りにしていた。

戦争の結果は悲惨だったが、私の生涯に与えた影響は大きい

彼らは諸事、質素をつらぬき無駄なことをしない厳格なピューリタンの家風であった。日本的にいえば質実剛健の気風である。戦後、アメリカの占領下、日常物資が入ってき、私たちがはやつと飢えを凌ぐことができたため、何となくアメリカという国は物質に困らない国だと、そして「物質主義」の国だと想像していた。

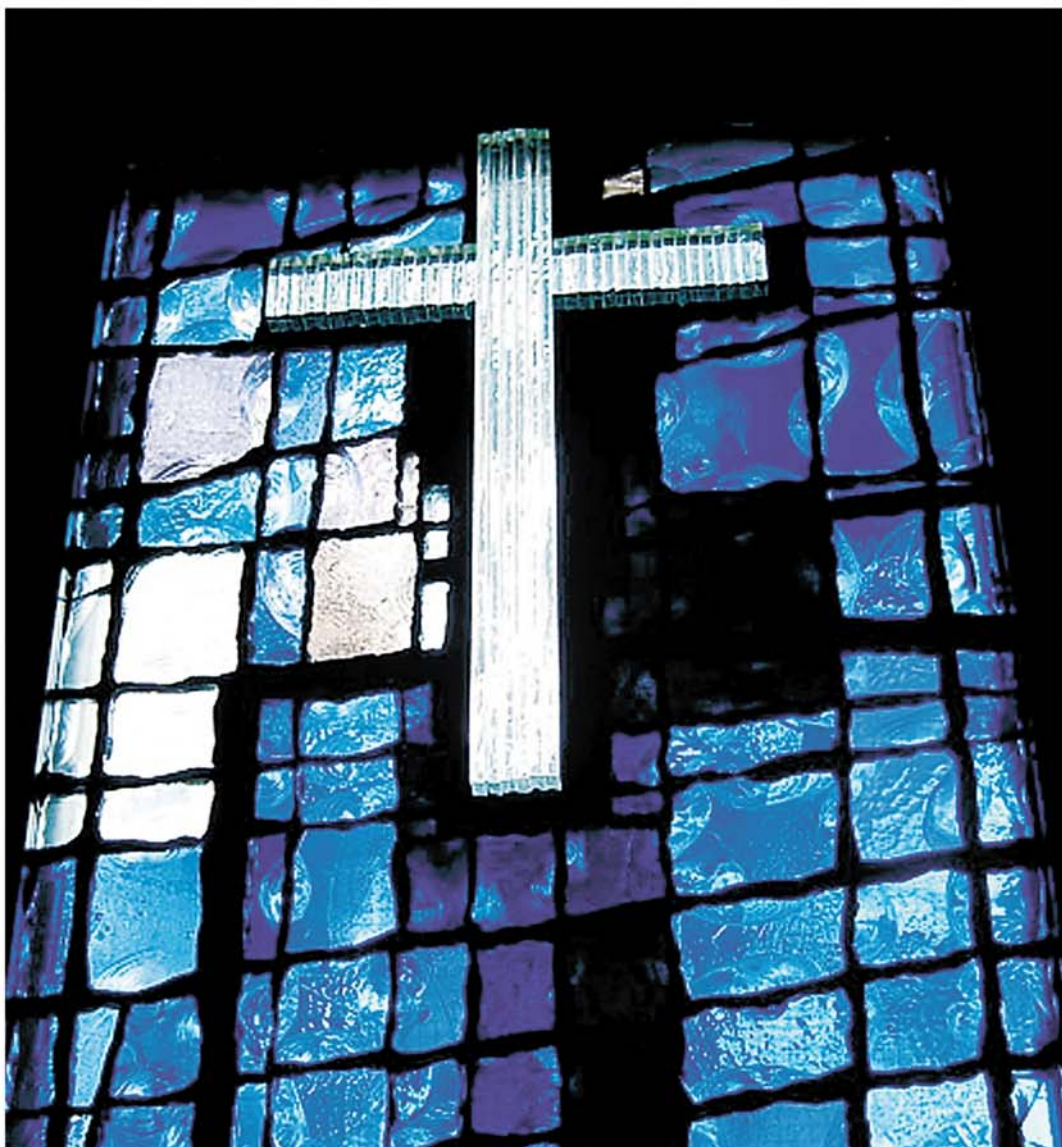


の生涯に与えた影響は大きく、今も戦争・敗戦が私の人生の出発点となっている。

●わたはる
 1934年、生まれ、大阪府立北野高校卒。神戸大学文学部卒業後、京都大学文学部研究科博士課程修了。京都大学博士、大阪外国語大学教授を経て、現在城西国際大学教授、石川県立歴史博物館長、「女性史青山」お賞や「川源義賞」のほか、2010年に文化勲章を受章。

戦後、日本人は物の豊かさ引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

ひるがえって現在の日本はどうだろう。物が溢れる家の中の光景を前に、食べるものが無くて困った時のことをよく思い出す。当時小学生だった私も、戦時中のことは今もありありと目に浮かぶ。戦争の結果は悲惨だったが、私



プロテスタントの教えは19世紀半ばから宣教師たちによって欧米から日本にも伝えられ、全国各地に幅広い信者をもった。日本基督教団室町教会(京都市上京区)

きょうの季寄せ(八月)

金魚大鱗
 夕焼の空の
 如きあり

松本たかし



夕日を受け、刻々色合いを異にしていく雲の变幻に感動しながら、作者は手帳に「金魚大鱗夕焼空の如くなり」と書きつける。しかし、物心つきはじめた頃から特に大柄な金魚の美しさに魅了された感銘は伝わって来ない。「金魚大鱗夕焼空の如くなり」と詠んでも、もの足りない。頭でっかちな表現を受け切るのは掲句の破調と比喩の確かさである。(文・岩城久治)

「きょうの心伝て」

加藤眞吾
 学芸員 京都市東山区/70歳

ガンコじいこのつぶやき
 私が学芸員として勤めている清水寺は、年間約500万人近い拝観者がある。1日に1万2、3千人が訪れる勘定だ。最近では外国の方々も多い。風俗習慣の違い、宗教上の制約などもあって、対応する側も戸惑うことが少なくない。

そんな中で最近、特に「困ったものだ」と感じさせられるのが、日本人修学旅行生たちの常識を欠いた行動だ。彼らには「常識」それも「他人に迷惑をかける」という常識の中の常識が欠落しているし、かと思えない。混み合っている人の中を、大声を出しながら、われがちに通り抜けようとする。周囲の人たちを不愉快にさせても平気だ。不愉快にさせるとか、迷惑をかけるとかいう感覚が最初から無いのだ。

引率の教師たちがこれまたひどい。注意一つしない。こんな指導者のもとにいる子供たちが、こうなっても当たり前か、という光景が毎日のように繰り返されている。

「きょうの心伝て」募集

●あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか?暮らしの中で忘れてはならないと思う日本人の心の承諾や、伝えたい京都に残る心遣いなどを寄せて下さい。京都新聞社で選考、添削する場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-1857 京都新聞COM「きょうの心伝て」係まで。E-mail: wasuremono@nhk.kyoto-npc.jp Fax: 075-26212200

●日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ/kyoto-npc.jp/kyo_nm/info/new/よりご覧いただけます。

変わってゆくカラダを、
 美しさに
 変えたい。

毎日、カラダの声を耳をすませ、小さな変化にも気づいてあげること。時とともに変わるカラダにぴったりの下着をつけ、いまとこれからの美しさを、丁寧に引きだしてゆくこと。

私たちの掲げる『ラブ、エイジング』という思想の背景には、1964年に設立以来、のべ4万人の女性のカラダを見つめてきた

ワコール人間科学研究所の成果があります。

同じ女性の体型を30年以上計測することで明らかになった、胸のサイズや形、柔らかさなど、すべての女性のカラダに起こる体型変化のステップ。

そんな、エイジングによって変わるカラダにワコールは「マイナス5歳」シリーズの商品と店頭でのコンサルティングを通して、

ウイングは、体型変化に対応した「キューティー」「キレイ」「グレース」の3つの商品ブランドを通して、きちんとフィットする下着をお届けしています。

いままでも、これからも。

『ラブ、エイジング』の思想に基づいて、変わってゆくカラダを、美しさに変えたい。私たちの想いです。

ラブ、エイジング。

